

吹くからに

秋の草木の
しほるれば

むべ山風を

あらしと云らむ

文屋康秀

今来むと

言ひしばかりに
長月の

有明の月を

待ちいでつるかな

素性法師



このたびは

ぬさもとりあへず手向山

紅葉のにしき

かみのまにまに

管
家

月みれば

千々に物こそ悲しけれ

わが身ひとつの

秋にはあらねど

大江千里



小倉山

峰のもみぢらばこころあらば

今ひとたびの

みゆきまたなん

貞信公

名にしおはづ

相坂山のさねかづら

人にしられて

くるよしもがな

三条右大臣



山里は

冬ぞさびしさまさりける
人めもくさも

かれぬとおもへば

源宗干朝臣

みかのはら

わきてながるゝ泉河

いつ見きとてか

こひしかるらむ

中納言兼輔



有明の

つれなくみえし 別れより

暁ばかり

うきものはなし

壬生忠岑

心あてに

をらばやおらむ 初霜の

をきまどはせる

しらぎくの花

凡河内躬恒



山川に

風のかけたるしがらみは
ながれもあへぬ
紅葉なりけり

春道列樹

あさぼらけ

有明の月とみるまでに
よしのの里に
ふれるしら雪

坂上是則



誰をかも

しる人にせむ 高砂の

松もむかしの

ともならなくに

藤原興風

ひさかたの

ひかりのどけき 春の日に

しづ心なく

花のちるらむ

紀友則



夏の夜は

まだ宵ながら明けぬるを

雲のいづくに

月やどるらむ

清原深養父

人はいさ

こころもしらず 故郷は

はなぞむかしの

かに匂ひける

紀貫之



忘らるゝ

身をば思はずちかひてし

人のいのちの

おしくもあるかな

右近

白露に

風のふきしく秋のゝは

つらぬきとめぬ

玉ぞちりける

文屋朝康



しのぶれど

色に出にけり わが恋は

物や思ふと

人の問ふまで

平兼盛

浅茅生の

をのゝしのはら 忍ぶれど

あまりてなごか

人のこひしき

参議等

